

別紙1-1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第 号
------	---------

氏 名

江副 文美

論 文 題 目

家族介護者の適応に関する質的研究
—娘・嫁・配偶者の介護の物語に焦点を当てて—

論文審査担当者

主 査

名古屋大学心の発達支援研究実践センター教授 金子一史

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 平石賢二

名古屋大学心の発達支援研究実践センター教授 永田雅子

論文審査の結果の要旨

本論文は、超高齢化社会に突入した日本において、喫緊の問題となっている介護者の適応について研究している。特に、重要な要因として続柄の違いに着目し、主介護者の役割を担っている娘・嫁・配偶者の介護の物語に焦点を当てて取り扱った。本論文では、介護者一人ひとりの体験の変遷を辿り、介護にどのように対処し適応していくのか、あるいはどのようにして適応の困難に陥るのか、その過程と特徴を明らかにすることを目的としている。

本論文は5章で構成されている。

第1章では、戦前から現代に至るまでの家族介護の動向と社会政策の変遷について整理している。その後、家族介護者の体験に関する先行研究の3つの主要なアプローチ、介護負担感に関する検討、介護肯定感に関する検討、認知症患者を介護する家族の体験過程に関する検討について概観している。そして、家族介護者への心理的支援に関する主要な取り組みを概説した。それらを通して、介護者それぞれの背景要因を考慮した上で、個別性を損なうことなく介護者の体験を理解することが、介護者への心理的支援を発展させるために必要な研究課題として示された。

第2章の研究1では、高齢の母親を介護する娘介護者の適応にかかわる要因を明らかにした。7名の娘介護者を対象に半構造化面接を実施し、調査協力者の介護の体験を時系列に沿って聴取した。その結果、【母娘関係にかかわるわだかまり】は、娘介護者の適応を困難にする最大の要因であることが明らかになった。【母娘関係にかかわるわだかまり】は、幼少期あるいは思春期に生起し、介護が始まり母親との接触頻度が高まることで顕在化していることを明らかにした。また、【母娘関係にかかわるわだかまり】は、連鎖的に【きょうだいへの不満】を引き起こしていた。一方、娘介護者の適応を助ける要因として、【人生の指針となる信念】と【きょうだいと協力】があることを明らかにした。これらのことから、心理的距離の近い母娘関係が継続する場合には、介護開始までに【母娘関係におけるわだかまり】を解消する機会を逸し娘介護者の適応が困難に陥る危険があること、自分と母親それぞれの個人としての人生を尊重することが、娘介護者の適応に繋がりやすいことを明らかにした。

第3章の研究2では、嫁介護者が義父母の介護にどのように対処し適応していくのか、その過程を明らかにした。10名の嫁介護者を対象に半構造化面接を実施し、調査協力者の介護の体験を時系列に沿って聴取した。その結果、以下の適応過程が描き出された。嫁介護者は、結婚当初から【嫁の義務】として介護を予期しており、義父母の老いや病に直面すると【介護を受容】していた。また、【客観的理解】や【諦め】によって、義父母の症状によるトラブルに対処していた。一方、【義父母とのかかわりにおける傷つき】は、【精神的疲労】を強めていた。これらのことから、義父母との良好な関係に価値を見いだすことで、前向きに介護に取り組み、自身の成長につながる体験として介護を受け止めているポジティブな嫁介護者像が明らかになった。さらに、嫁介護者は、義理の関係であることで、実子よりも要介護者を個人として受け止めやすく、認知症などの症状によるトラブルに際し、冷静に対処できる強みを有していることが示された。

第4章の研究3では、配偶者介護における適応過程を明らかにした。身体機能の障害を伴う疾患を発症し、全面的な介護を必要としていた配偶者介護の経験者4名を対象に半構造化面接を実施した。介護者は、配偶者の発症によって【困惑】に陥るが、【夫婦の絆】を実感することで【介護を受容】し、

別紙 1 - 2

論文審査の結果の要旨

【積極的姿勢】で介護に取り組んでいることが明らかになった。さらに、介護者は【サポートを活用】し【周囲の支え】を実感することで、【療養環境を肯定的に評価】していることが示された。また、子育てや仕事といった介護以外の役割が、夫婦関係を支える【精神的支柱】となっていた。以上を通して、配偶者介護における適応過程は、【夫婦の絆】つまり伴侶性によって大きく支えられていることを示した。

第5章では、上記の研究で得られた知見を整理して、本論文の意義を述べている。また、本論文の限界と課題について述べた後に、今後の展望として、家族介護者への心理的支援の発展に向けた提言を行っている。

本論文の特色と学術的意義としては、以下の点が挙げられる。

- (1) 家族介護者の体験に関する先行研究は、介護負担感や介護肯定感を量的に測定して検討しているものが多い。一方、本論文は面接調査による質的データより、介護者の適応の困難の要因は、介護の大変さそのものではなく介護者と要介護者との関係性の問題に起因していることを明らかにしたこと。
- (2) 認知症患者を介護する家族を取り扱った先行研究では、進行性かつ不治の疾患である認知症そのものの特徴に規定された理解に留まっている。けれども、本論文は認知症に限らない家族介護者の体験過程について、広く取り扱っていること。
- (3) 介護者の背景要因として続柄の違いに焦点を当てて、介護へどのように対処し適応していくのかに関して、娘・嫁・配偶者のそれぞれに対して異なった特徴を明らかにしたこと。

本論文の研究成果は、今日の日本において対策および支援が急務となっている家族介護に関して、大変重要な知見を提供している。また、介護者支援の現場で活動する心理臨床家が未だ少ない中で、独自の大きな貢献を果たしていると言える。

本論文に対して、審査委員からは以下の疑問点、問題点が指摘された。

- (1) 研究協力者の特性が結果に影響している可能性はないか。家族介護に至らない場合については、どのように考えることが出来るか。
- (2) 各研究で、分析方法が異なっているのはなぜか。個々の研究に共通する適応過程を描ける可能性はないか。
- (3) 欧米の先行研究も多数引用されているけれども、日本の家族観と欧米の家族観の違いはどのように考えるか。また、現代の家族観は、以前より変化している可能性はないか。
- (4) 介護は一人で行うとは限らないのではないか。ヘルパーの支援など、複数の支援システムの観点からダイナミックスを捉える必要があるのではないだろうか。

別紙 1 - 2

論文審査の結果の要旨

審査委員からのこれらの指摘に対し、博士学位申請者は、研究の限界や課題についても十分認識しており、質疑に対する回答も、適切かつ妥当なものであった。また、これらの課題は今後の研究によって対処していくことが可能であると判断した。

以上の結果を総合し、審査委員は全員一致して、本論文を博士（心理学）の学位に値するものと判断し、論文審査の結果を「可」と判定した。